

## 2. 遺物について

総数16,543点の遺物が出土した。概要はⅢ章（A地区）・Ⅳ章（B地区）の冒頭に記載したとおりである。A地区では土器集中域のものが大半で、B地区では竪穴住居跡のものが多くことが大きな特徴である。土器の主体は縄文時代中期後半の榎林式と晩期後葉の聖山Ⅱ式で、これらで出土総数の99.3%を占める。定形的石器は105点と少ないが、ていねいに凹面を作りだしている石皿など特徴的な石器がある。また土製品は土器片再生円盤、石製品は小破片で検出された IH-3 出土の石棒片が特記される。

### （1） 榎林式土器について

出土土器の主体であり竪穴住居跡に伴って出土した榎林式土器について、その特徴を関連遺跡と比較して述べる。

#### 出土状況の特徴

包含層出土のものは少なく、大部分は竪穴住居跡から出土している。埋設土器は9軒の竪穴住居跡からそれぞれ1個体ずつ出土している。復元・図示できたものは5個体で、残りは小破片が残存していたものと脆いために取上げ時に崩壊したものである。9個体のうち1個体（IH-11）は深鉢の底部で、残りは口縁と底部が欠落した胴部である。上端の断面は磨滅して丸みを帯びているものが多い。また内面を見ると上辺から数cm下に黒色物質が輪をなして付着しているものもある（IH-6・10）。埋甕炉として機能していたことを示すものである。

床面出土の土器は少数である。床面付近として取上げた土器も、覆土の堆積が薄い部分から出土したとみられる（IH-2・3・6）。覆土からまとまって出土するものは、竪穴中央部付近（IH-3・4）と壁際付近（IH-1・2・6）がある。破片は覆土下位や壁際付近から多く出土している。覆土がある程度堆積した後で投棄された土器とみられるものが多く、埋設土器と覆土出土土器に若干の時期差があるとみられる。

#### 石倉 2 遺跡出土の榎林式の特徴

全体的には以下の特徴がある。

〔器種〕深鉢を基本とし、それ以外はほとんどない。器高15cmは程度から40cmを超えるものまであるが、30cm程度のものが多い。

〔器形（深鉢）〕胴部が膨らみ、頸部がくびれ、口縁部が緩やかに外反する深鉢が基本であるが、ふくらみやくびれがほとんどないものも多い。口縁部はやや肥厚するものがある。口唇は肥厚するものは少なく、基本的に角形である。底部の張り出しはなく、底面は平坦である。

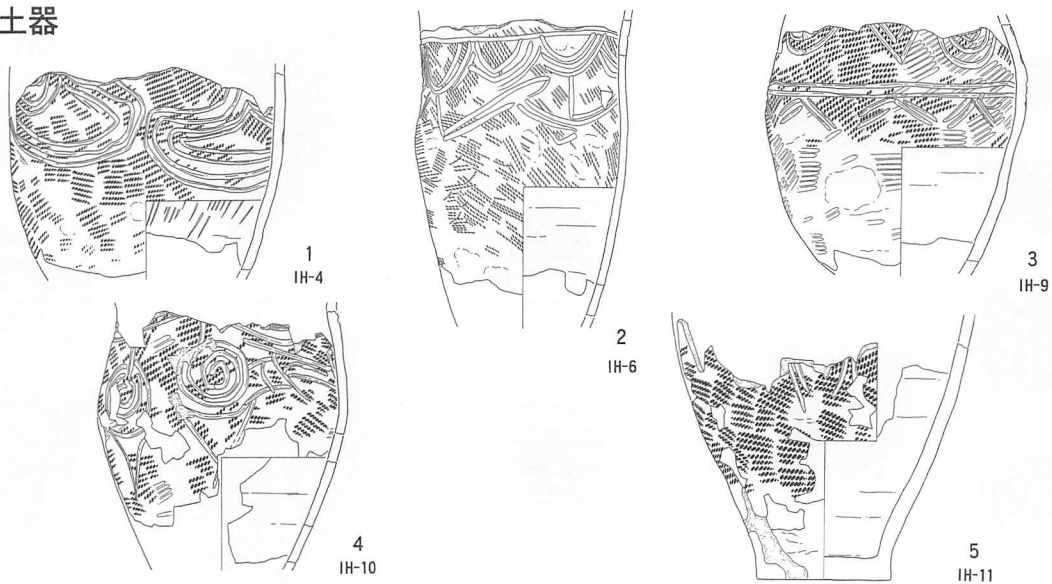
〔地文〕撚糸文・単節縄文・櫛歯状工具による条痕文・無文の順に多い。特に撚糸文の多さが目立つ。少し間隔のあいた撚糸が、上から下へやや斜方向に施文されている。

〔文様〕基本的に二本一組の太目の沈線で文様をえがくものが多い。

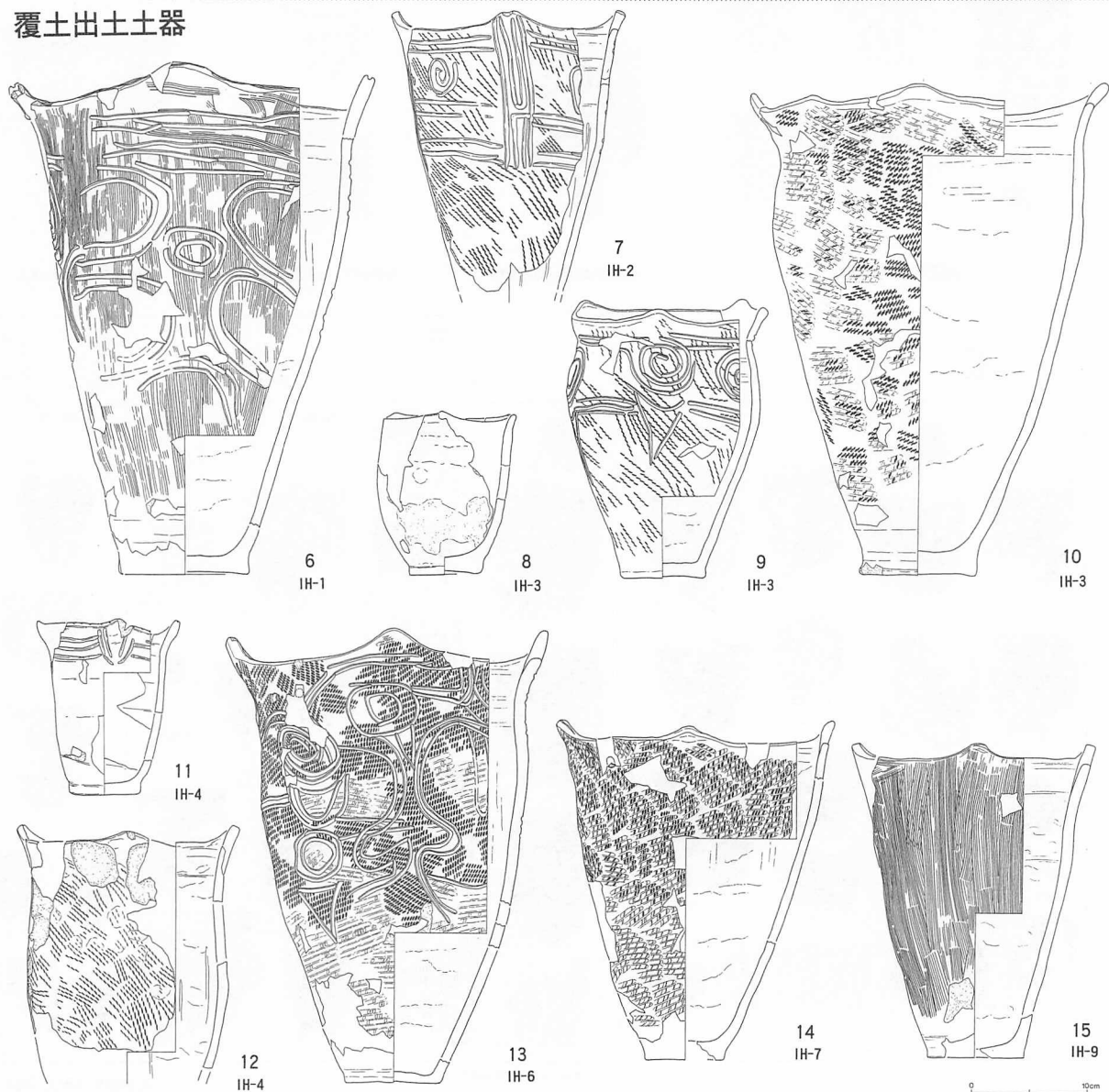
胴部の沈線のえがき方で、以下の4つのまとまりに分類することができる。

- A. 横走沈線の下に弧線文（または鋸歯文）を連続しているもの　〔図Ⅵ-3-2・9など〕
- B. 横走沈線の下に渦文（または円文）を配し剣菱文を垂下させ、それらを連繋する沈線があるもの　〔図Ⅵ-3-4・5・9など〕
- C. Bの文様が乱れ、曲沈線や蛇行沈線になっているもの　〔図Ⅵ-3-6・13など〕
- D. 杵状の区画文があるもの。頸部に貼付隆帯があるものが多い　〔図Ⅵ-3-7など〕

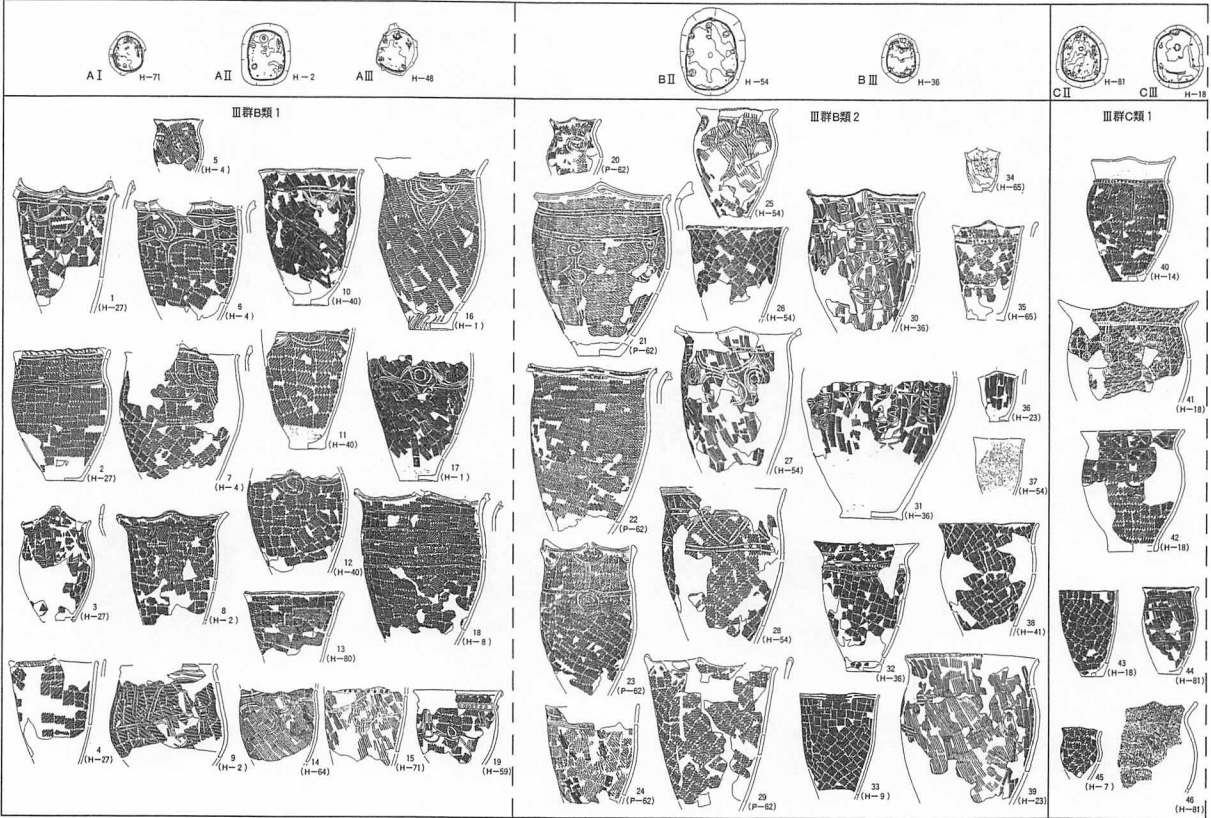
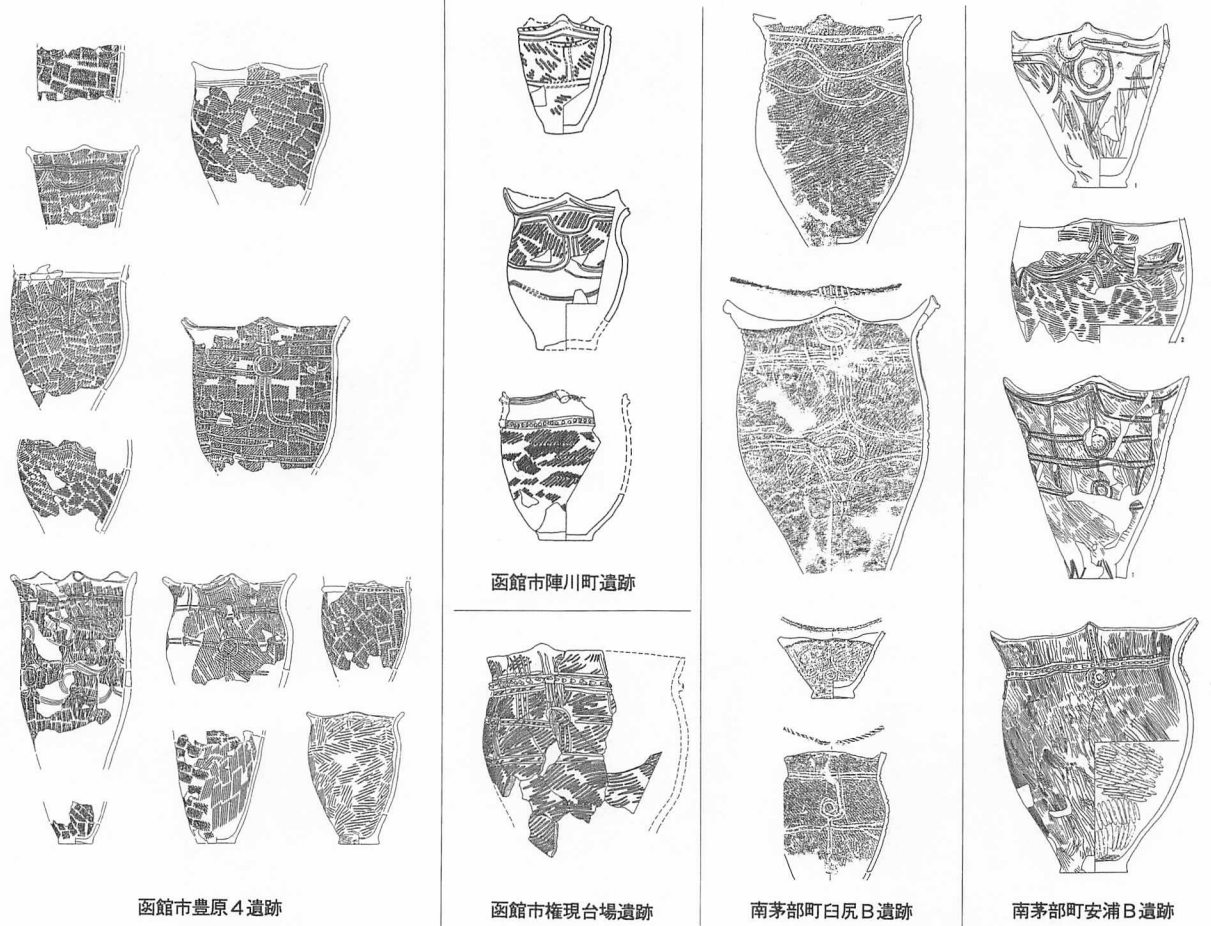
埋設土器



覆土出土土器



図VI-3 石倉2遺跡竪穴住居跡出土土器集成



南茅部町大船 C 遺跡

図 VI - 4 榎林式土器の例

## 他の遺跡との比較検討

森町により近い遺跡での例を概観してみる。

〔函館市陣川町遺跡〕口唇上に刻み様の縄文圧痕があり胴部に横走沈線と弧線文が見られる見晴町式の名残のある土器や、渦文の兆しが見られる弧線文がえがかれている、榎林式の中でも古い段階に属するものと思われる土器が数点見られる。また頸部に貼付隆帯をもち胴部が膨らむものがある。

〔函館市権現台遺跡〕貼付隆帯と杵状文がえがかれる、上記Dと共通の要素をもつ土器を示した。

〔函館市豊原4遺跡〕中期後半の竪穴住居跡が34軒検出され、埋設土器をもつものが多い。埋甕炉のあり方は多様で、「双子埋設」・「入子埋設」・「入れ替え埋設」がみられる。埋設土器は径30cm前後の大型の深鉢があり、口縁部が残存しているものもある。内面口唇下数cmには、帯状に黒色物質が付着しているものが多い。文様は弧線文を主体にえがくものが見られるが、複数の円文と連繋する沈線を基本とする文様も多く、頸部に貼付隆帯があるものも見られるなど、上記A～D各グループと共通する要素をもつものがある。

〔南茅部町白尻B遺跡〕縄文中期後半の集落跡であり、多量の土器が出土している。文様は弧線文を主体にえがくもの、複数の円文と連繋する沈線を基本とする文様が多い。杵文で区画された文様や頸部に貼付隆帯がある、大安在B式につながる要素をもつものも出土している。

〔南茅部町安浦B遺跡〕渦文と剣菱文を主体とするが配置が乱れているものが多い。また頸部に貼付隆帯があり胴部が膨らむものも多く、全体として榎林式の中でも新段階に属するものと思われる。

〔南茅部町大船C遺跡〕楕円形から舟形を呈する多数の大型住居跡が検出され、それに伴う榎林式～ノダップⅡ式について坪田氏がまとめている(図はその前半部分)。これによると、Ⅲ群B類1は弧線文がえがかれるもの(上記A)、渦文・剣菱文がえがかれるもの(上記B)が主体で、Ⅲ群B類2はそれらがやや乱れた配置になるもの(上記C)が主体、Ⅲ群C類1は杵状文(上記D)が主体となるものが多い。しかしこれらの文様が各類にもみられ、それぞれの文様のまとまりに時間的な画期をおくことは困難な部分があるようである。

## 編年の位置付けについて

榎林式は、青森県天間林村二ツ森貝塚の調査で1939年に角田文衛氏により設定されたもので、その後鈴木克彦氏による精力的な研究がある(鈴木1976ほか)。口縁部の溝線文・渦巻文の変化や胴部にえがかれる沈線による文様から細分している。この細分にならうと、石倉2遺跡出土土器の上記の4区分について、Aは榎林1式、Bは榎林2式、Cは中の平Ⅱ式の要素に共通する要素をもっている。一方、上記Dは中の平Ⅲ式に一部近いものの、他のグループから比べれば異なるものである。

石倉2遺跡出土土器は、全体的には榎林式の中でも新しい段階(榎林2式～中の平Ⅱ式・鈴木1976)に属するものが多いと思われるが、次に示す点に注意が必要である。

上記Aに属する弧線文を主体とする土器は「榎林1式」に近い要素がある。一方、主体をなす上記Bの文様、つまり渦文・剣菱文を基本とする文様については、東北地方北部の榎林式と大きく異なる要素をもち始めるように見受けられる。口縁部があまり肥厚せず角形の口唇が多いことと、それに関係して口唇部に溝線文・渦文があまり施されないこと、二本一組の沈線を多用すること、地文に撚糸文や櫛描文を多用することなどである。また上記B・Cの文様が伴出する例が多く、並存するものが多いと思われる。設定された榎林式を基本としつつも、特に後半は独自性が見られるようになる。この段階における細分は、さらなる検討を加える必要がある。さらに頸部の貼付隆帯や杵状沈線がえがかれるなど、東北北部の変遷とは異なる要素がみられ、大安在B式に続くこととなる。(阿部)